

平成28年度 校内研修 計画案

1 研修の目的

全職員が実践的研修を相互に深め、教職員としての資質の向上に努めるとともに、児童の様々な力を伸ばすための具体的実践を積むことによって学校教育の充実を図る。

2 研修の視点

- (1) 本校の学校教育目標を達成するための研修
- (2) 教職員としての専門性や視野を広げる研修
- (3) 児童の変容を追求し、その喜びを味わえる研修
- (4) 全職員の協力体制のもと、効果的な運営組織で進め、主体的に参加する研修

3 研修の基本方針

(1) 課題研修

- ア 全職員の意思統一を図り、常に児童と密着した研究を進める。
- イ 課題研修の深まりや実践が、児童に反映される研修を進める。
- ウ 教師としての専門性を深めるために、全職員が主体的に参加し、創りあげる研修にする。

(2) 現職研修

- ア 人権教育研修、特別支援教育研修、性教育研修、食育研修、道徳教育研修、情報教育研修、不祥事防止研修等を推進していく。
- イ 職員の希望に添った実技研修を行うことにより、実践的力量的の向上に努める。
- ウ 村内保育所、中学校との連携を密にし、研究の機会を持つ。(保小中連携)
- エ 各種研究会の報道や、児童理解の場を適宜設け、共通理解の場とする。

4 課題研修について

(1) 研究主題

自ら学び、共に高め合う子どもの育成

～算数科における協働学習の工夫を中心に～

(2) 主題設定の理由

ア 教育の今日的課題から

基礎・基本を徹底しながらも、自ら学び自ら考える力等を大切にした指導を積み重ねること
で、「生きる力」の知的側面である「確かな学力」の育成を図ろうとする考え方は、平成8年の
中央教育審議会答申以来、一貫して言われ続けている。ということは、我が国の児童は、「確か
な学力」の中でも特に、思考力・判断力・表現力等に課題があると言える。実際、OECDのPISA
調査からは、我が国の児童において「思考力・判断力・表現力等を問う読解力や記述式問題、
知識・技能を活用する問題に課題がある」という結果が見られている。つまり、基礎的・基本
的な知識・技能を確実に習得させるとともに、それらを活用させながら思考力・判断力・表現
力等を高めさせる指導が今後も求められていることは明白である。

しかし、留意しなくてはならないこともある。それは、課題として挙げられた力を高める指
導に重点を置きすぎるあまり、児童の学ぶ意欲を二の次にしてしまうことである。あくまで児
童の「学びたい」「学んで楽しい」という思いは大切にされなければならない。そこを出発点
にした指導を行い、学ぶ意欲を十分にもった児童は、主体的に思考力・判断力・表現力等を働
かせるため、結果的に、課題として挙げられた力を効率的に高めていくことができるのではな
いかと考える。

イ 本校の教育目標及びめざす児童像から

平成28年度の本校の教育目標及びめざす児童像は次の通りである。

教育目標

「郷土に誇りを持ち、心豊かで、主体的に行動できる徳・知・体の調和のとれた子どもの育成」

めざす児童像

- 自分の考えを思いやりの心を持って表現できる子ども（創意）
- 自ら進んで学ぼうとする子ども（自主）
- 辛抱強さ、我慢する心を持ち、何事もあきらめない心身共にたくましい子ども（忍耐）
- 郷土に学び、郷土を愛する子ども

本校の教育目標の中には、「主体的に」という言葉が入っている。また、めざす児童像の中には、「自ら進んで学ぶ」「何事にもあきらめない」という姿も掲げられている。このことから、児童の主体性や学ぶ意欲を大切にしたい指導が必要不可欠であると言える。また、昨年度同様、めざす児童像を、児童が具体的にとらえ、意識しながら実践できるように、3つのダイヤ玉（発見玉、親切玉、粘り玉）という形で、児童に提案している。

3つのダイヤ玉とは

【親切玉（徳）】・・・相手の気持ちを感じ取り、優しく、親切に行動できる力
【発見玉（知）】・・・新しいことを見つけ、いろいろと考え工夫する力
【粘り玉（体）】・・・何事にも我慢強く、最後までやり抜く力

いくら児童にとって、明確なものになったとしても、教師が一方的に教え込んで意味がない。児童が、主体性や学ぶ意欲をもち、3つのダイヤ玉を磨いていけるように工夫する必要がある。

ウ 本校児童の実態から

どの学年の児童も、学習に対する意欲が高い。また、「岩野っ子学習のやくそく」で培われた学習規律も、概ね身に付いていると言える。本年度は、話し方、聞き方、話し合わせ方に焦点を当て、具体的に指導していきたい。

一方、ここ最近の県学力調査や全国学力・学習状況調査の結果から、必要な情報の取り出し方や取り出したことをもとに考えたり、考えたことを表現したりする力が十分に身に付いていないという課題が明らかとなっている。また、既習の知識や技能の習得、言語力の育成にも継続して取り組まなくてはならないと考える。さらに、学年によっては学力に個人差が見られるため、学ぶ意欲はあっても、自力で課題(問題)解決を図るには困難を生じる児童も見られる。

以上、今日の教育的課題、本校の教育目標及びめざす児童像、そして本校児童の実態等をもとに総合的に考えると、本来もっている学ぶ意欲を最大限生かし、既習の知識や技能を活用しながら思考力・判断力・表現力等を仲間と共に高めていく子どもの育成に重点を置き、本年度の研究を進めていく必要があると考える。なお、本年度は、算数科学習指導を中心に据え、目指す姿の具現化を図りたい。

(3) 研究主題について

ア 「自ら学び、共に高め合う子ども」とは

「自ら学ぶ子ども」とは、目の前に立ちはだかる課題(問題)に対して、まずは自分一人の力で解決を図ろうと主体的に取り組む子どもの姿のことである。また、「共に高め合う子ども」とは、つくり出した自分の考えをもとに友達と学び合う中で、考えを付加・修正・強化するだけでなく、深化させていく子どもの姿のことである。つまり、「自ら学び、共に高め合う子ども」とは、自分でやり抜く力を大切にしながら、決して独りよがりにならず、他者とのかわりを繰り返す中で、自分を高めていく子どものことなのである。

なお、本年度は、主題の姿を以下の3点で考え、達成状況を判断したり改善に生かしたりすることにする。

【主題の姿1】主体的に課題(問題)解決に取り組むことができる子ども

【主題の姿2】友達と学び合う中で、考えを広げたり深めたりすることができる子ども

【主題の姿3】学習したことを活用することができる子ども

イ 「協働学習」とは

「協働学習」とは、子どもたち同士が教え合い、学び合う協働的な学びのことである。具体的には、分かっていることを友達が理解するまで教え説得したり、分からないことを分かるまで友達に聞き納得したりするという双方向的な活動を通して、全員が本当に分かり、できる状態になっていくというイメージである。

昨今、文部科学省は、今日の教育的課題を解決する一つとして、教師主導ではなく、子どもが主体となった協働学習の必要性を提唱している。また、アメリカ国立訓練研究所が、学習定着率を表すラーニングピラミッド（いわゆる講義は5%、資料や書籍を読むことは10%、視聴覚は20%、実演によるデモンストレーションは30%、グループディスカッションは50%、実践による体験・練習は75%、誰かに教えることは90%と、より能動的で主体性が必要な学習形態ほど学習定着率が高い）という研究成果を出している。

これらのことから、「何を教えるか(学習内容)」という知識の質や量の改善はもちろんのこと、「どのように学ぶか(学習方法)」という学びの質や深まりを重視することが必要であり、本年度は、協働学習をキーワードに算数科学習指導を中心に研究を進めていきたい。

ウ 「算数科における協働学習の工夫」とは

「算数科における協働学習の工夫」とは、一人で考えをもった後の友達との交流場面を協働学習と位置づけ、そこでの学習形態や子ども同士の関わらせ方を工夫することである。

また、協働学習を活性化させるため、子どもの意欲をより高める導入場面の工夫や協働学習を通して子ども一人一人が本当に分かっているのか評価する終末場面の工夫も併せて行う。

(4) 研究の仮説

仮説1	算数科を中心に、 <u>児童の意欲をかき立てる教材との出会い</u> を工夫すれば、主体的に課題(問題)解決に取り組むことができるであろう。
仮説2	算数科を中心に、一単位時間における学習過程の中で、 <u>子ども同士が教え合い、学び合う協働学習の場面</u> を工夫すれば、友達とのかかわりを通して、考えを広げたり深めたりすることができるであろう。
仮説3	<u>既習の知識や技能を確実に習得させたり、言語力を高めさせたりする日常的な指導</u> を継続的に行えば、算数科における授業場面を中心に、身に付けた知識や技能を活用し、考え判断したり、表現したりする力がより旺盛に働くであろう。

(5) 研究の視点

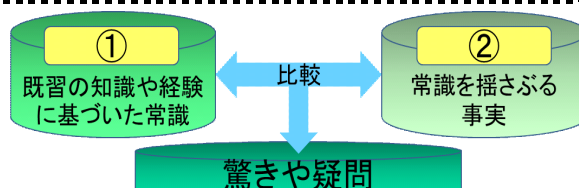
仮説検証のための研究の視点と具体的方策は以下の通りである。なお、視点1と2は校内研修を通して、視点3は日常的な指導を通して実現していくものである。

視点1(仮説1について)

児童の意欲をかき立てる教材との出会わせ方

○ 教材との出会わせ方

驚きや疑問をもたせ、学習意欲を高めるためには、右図のような出会わせ方が必要であると考え。①を提示後、②を提示するという順序も大切にしたい。



例えば、算数科の学習場面で考えると、既習の学習と未習の学習を比較し、驚きや疑問が湧く中で、共通点や相違点に気づかせるとともに、結果や方法の見通しをもたせながら、課題を把握させていくというイメージである。

しかしながら、毎時間このような出会わせ方は難しいと考える。そこで、ICTや具体物の活用、身近な話題や他教科と関連付けたオリジナル問題の作成等、学習内容や各学年の児童の実態に応じて、出会わせ方を考えていくようにする。

視点2(仮説2について)

子ども同士が教え合い、学び合う協働学習の工夫

① 協働学習を位置つけた一単位時間における学習過程

協働学習を位置つけた一単位時間における学習過程を以下のように工夫し、算数科を中心とした学習指導の基本スタイルとする。なお、熊本県型授業で提案されている徹底指導と能動型学習を意識し、メリハリをつけ展開していくことも、忘れてはならない。

	学習過程	学習活動	教師の主な支援
つかむ	(1)課題(問題)との出会い (2)本時めあての把握	○ 課題(問題)と出会い、驚きや疑問等を感じ、追求意欲をもつ。 ○ 目的意識や学習後のゴール像を明確にして、めあてをつくる。	※ 課題(問題)の提示方法を工夫する。 ※ 学習後の姿が具体的にイメージできるようにする。
さぐる	(3)「一人学び」 ※徹底指導を重視	○ 自分一人で、課題(問題)に対する考えをもつ。 ○ 自分一人で考えがもてない場合教師との対話やヒントコーナー等の活用を手がかりに考えをもつ。	※ 考えの書かせ方を説明する。(=考えの可視化) ※ 事前に児童一人一人の実態調査を行い、それを基にした場の工夫を行う。
ふかめる	(4)「協働学習」 ※能動型学習を重視 クライマックス(山場)	○ 友達と学び合い、考えを付加・修正・強化する。 ○ 新たな投げかけをもとに再度、友達と学び合い、考えを深める。	※ 児童の実態に応じて、学習形態の工夫を行う。 ※ 考えを深めさせるための発問や資料提示等を行う。
まとめる	(5)本時まとめの確認 (6)評価テスト(適用問題等)または学び方のふ	○ 本時でわかったこと、できるようになったことをまとめる。 ○ 本時の自分の達成状況を、評価テスト(適用問題等)を通して、把	※ めあてをふり返らせながら、まとめさせる。 ※ 本時のねらいに到達できたか見取るため、評価テス

・ い か す	り 返 り	握する。また、学び方のふり返り を行い、次時に生かす。	ト(適用問題等)を行わせる。 また、学び方の改善のため、 ふり返りの時間も設定する。
------------------	-------	--------------------------------	--

② 協働学習における学習形態

協働学習を通して、友達と考えを絡ませ合い、付加・修正・強化を繰り返すことで、考えの信頼性が増し、自分にも自信がもてると考える。ここでは、ペア学習、グループ学習、フリートーク、全体交流という学習形態に絞り、それらをどう組み合わせるか、1つの形態で進めていくか工夫していくことにする。それぞれに長所や短所があり、それらを加味しながら、ねらいや学習内容、児童の実態に応じて決定されるべきである。

学習形態	主な方法と内容	長所	短所
ペア学習	2人組による学び合いのこと。聴き手は、友達の考えをうなずきながら最後まで黙って聴き、必要に応じて意見や質問をする。話し手は、自分の考えを相手に分かりやすく伝える。具体物使用が効果的。	○ 自己表現が苦手な子どもに抵抗が少ない。 ○ 短時間で考えを伝え、確かめられる。	● 2人組の構成によっては、交流が深まらない。 ● 多面的な広がりが少ない。
グループ学習	3～5人組による学び合いのこと。一人一人が順番に自分の考えを伝えていく。それに対して聴き手はうなずきながら最後まで黙って聞く。その後、必要に応じて意見や質問をする。また、互いの共通点や相違点を考え、それぞれの良さを確認することもできる。	○ 多様な考えにふれることで自分の考えを付加・修正できる。 ○ 多面的な広がり期待できる。 ○ 相互交流が活性化しやすい。	● 構成によっては、言力のある子どもの考えに流れ、交流が広がり深まったりしない可能性がある。 ● 役割の固定化が生まれる。 ● 一人一人が伝える時間が少ない。
フリートーク	自由に席を立ち、自分で友達を見つけ、集団をつくり行う学び合いのこと。自分で学び合いたい集団をつくり、自分の考えを確かめたり見直したりする。分かる子どもには、相手が分かるまで説得させたり、多様な考えづくりに挑戦させ広げさせたりする。分からない子には、答えの根拠にこだわり納得いくまで友達に質問させるようにする。お互いが学び手という意識を大切にする。	○ 自分のペースで学べる。 ○ 自分の考えを表現しやすい。 ○ 多様な考えにふれ自分の考えを何度も付加・修正・強化できるため、自信がもてる。 ○ 主体的、能動的に動きやすい。	● 集まるメンバーが固定化する。 ● 自分から聞きにいかず集団に入れない子どもが出てくる可能性がある。 ● ただ写す、教えてもらうなど、やや受動的な子どもも出てくる。 ● ねらいからはずれても気づかず考えを練り上げるグループも出る可能性がある。
全体交流	全員でお互いの方法や考え方を確認し、高めていく学び合いのこと。	○ 多様な考えにふれ自分の考えを付加・修正・強化したり確認したりできる。	● 受動的に動く子どもが出やすい。 ● わかったつもりの子どもも出てくる。

③ 協働学習における学び合わせ方

お互いが納得する形で学び合いが終わるためには、学習形態以上に学び合わせ方が重要になってくると考える。特に、協働学習中、自分は何が分かっているのか積極的に発信したり、相手は何が分かっているのか推察しながら教えたりする等の双方向的な活動が望まれる。そこで、本年度は、以下のような段階を設定し、各学年の発達段階に応じた学び合わせ方を検討していく。最終的には、相手の理解度に応じた関わり方ができるようにしたい。

段階		学び合わせ方のポイント
レベル 1	「共感」を大切に した学び合い ※主に低学年で重点 を置いて	○ まずはお互いの考えを受け入れようとする段階。ここでは、お互いの考えのよいところを発見し、付加や修正を繰り返す等して、共感的に学び合う。そうすることで、お互いの考えが確かになるだけでなく、共感的人間関係の強化にもつながる。
レベル 2	「発見」を大切に した学び合い ※主に中学年で重点 を置いて	○ 本当に分かり、できているか確かめようとする段階。ここでは、お互いの考えの理由や根拠を探るため、質問をする等して、学び合う。そうすることで、お互いの考えがより確かになり、考えの強化につながる。
レベル 3	「納得」を大切に した学び合い ※主に高学年で重点 を置いて	○ よりよいものを納得するまで追求していこうとする段階。ここでは、お互いの考えに折り合いをつけながら、建設的に学び合う。そうすることで、一つの考えに偏らず、多面的に考えを深めていくことにつながる。

④ 考えの可視化

協働学習中、お互いの考えを可視化し、同じイメージをもちながら友達と学び合わなければ、考えがずれ違ったり、ねらいから外れたりする等の問題が起きてしまう。そこで、学習ノートや板書、ICT活用(主に電子黒板や端末タブレット)の工夫を通して、考えの可視化を行い、協働学習のさらなる充実を図りたい。

⑤ クライマックス(山場)の場の設定

協働学習の収束場面で、教師から新たな発問の投入や資料提示を行う等の工夫が必要になってくると考える。そうすることで、考えが一気に深まることが期待できる。クライマックス(山場)ともいえる場を演出することで、児童の学ぶ意欲もぐっと高まり、思考力・判断力・表現力等もより旺盛に働くのではないかと考える。

⑥ 自己の達成状況を実感させる評価方法の工夫

「自分はわかっている」「自分でできる」等を学習の終末段階に実感させることが、児童にとって次時への原動力になると共に、自分への自信につながる。そのため、終末段階に評価テスト(適用問題等)に取り組む時間を設定しておく。また、自分たちの学び方はどうだったか振り返る時間も設定しておくことで、次時の学び方の質が高まると考える。

なお、学習内容によっては時間が足りないことも考慮し、学習のまとめを、キーワードを活用し書かせたり、友達と今日分かったことを伝え合わせたりする等の場の工夫も、達成状況を実感させる上で有効的であると考え。

視点3(仮説3について)

既習の知識や技能を確実に習得させたり、言語力を高めさせたりする日常的な指導

① 意図的・計画的な家庭学習の取組

学校で学んだことを定着させるには、家庭学習の習慣化が必要不可欠であると考え。その日学んだことを、時間をかけ、じっくり取り組むことで、より確かなものになっていく。だからこそ、家庭学習の内容にこだわり、学校で学んだことを家庭で強化するというサイクルをつくるのが大切である。児童の実態に応じて、家庭で予習したことを学校で確かめたり生かしたりするというサイクルにすることも、児童の学ぶ意欲を高め、自主的に取り組む姿勢を身に付けさせる上で有効ではないかと考える。何より、保護者の協力なくして達成できないと考える。学級通信や日々の連絡等で継続的な啓発を行う必要がある。

② 朝自習や学力充実タイムの有効活用

毎週月曜日の朝自習の時間(15分間)を活用し、既習の知識や技能を確実に習得させる。ここでは、学級児童の実態に応じて、教科を選択したり学習内容を決定したりする。また、時間も限られているため、徹底指導を中心に行う。

隔週1回の学力充実タイム(45分間)を活用し、既習の学習内容の定着を図ったり、それらを活用し思考力・判断力・表現力等を発揮する問題に取り組ませたりする。学力充実タイムは、時間に余裕があるため、思考力・判断力・表現力等を発揮する問題に重きを置いて指導を行う。例えば、県学力調査や全国学力・学習状況調査の過去問の活用が望ましい。

③ 言語環境の整備

主に以下の工夫を行えば、豊かな言語環境の中で言語力を高めていくことができると考える。

- 教師の児童に対する望ましい話し方・聴き方
- 算数科を中心とした児童同士の話し方・聴き方モデルの作成

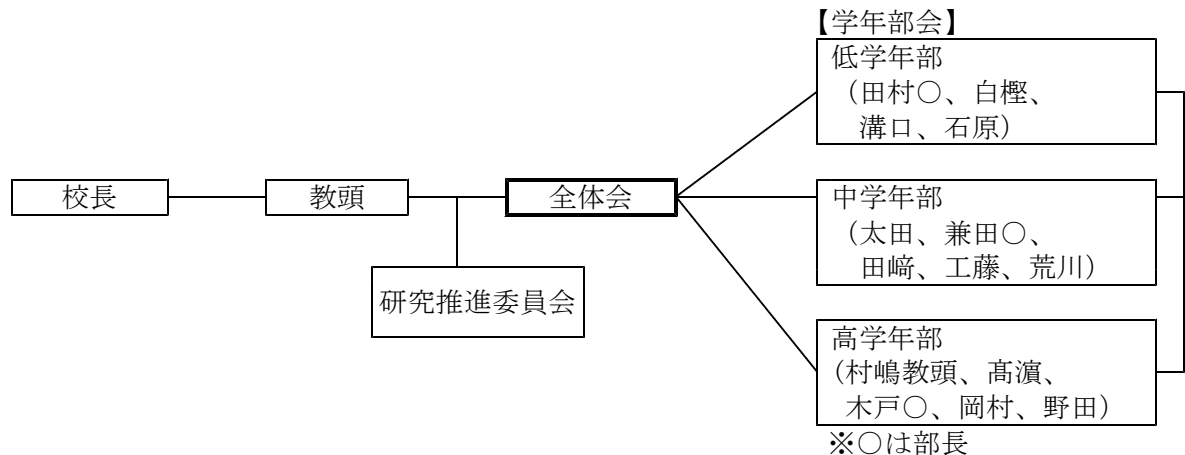
- 教室内または校内掲示板における言語力が身に付く掲示物、対話が生まれる掲示物の作成
- ④ 日常的な言語活動の充実
- 主に以下の言語活動を継続的に行えば、言語力を高めることができる考える。
- あいさつ日本一大作戦を核にしたあいさつの励行
 - 読書活動の推進（朝の読書、読書週間、ビブリオバトル）
 - なかよし集会での発表の機会
 - 朝の会、帰りの会での発表の工夫（1分間スピーチ等）
 - 国語科を中心とした言語力を育てる場の工夫
 - 辞書の活用（低・・・「親しむ」、中・・・「慣れる」、高・・・「使える」）

5 研究構想図



6 研究の組織

(1) 研究組織



(2) 職員の所属

① 研究推進委員会

校長、教頭、教務主任、研究主任、各学年部長

② 事前検討会

研究主任、各学年部

7 研究の活動内容

(1) 研究推進委員会

- ア 研究計画の立案・修正
- イ 研究内容の検討
- ウ 研究推進のための連絡・調整
- エ 先進校の実践報告などの文献紹介
- オ 研究通信の発行

(2) 講師招聘

(3) 全体会

- ア 研究計画・研究内容の討議
- イ 研究関連の学習会
- ウ 研究授業の事前・事後検討会

(4) 学年部

- ア 教材研究
- イ 環境整備
- ウ 研究授業の計画・準備

8 研究の進め方

- 研究推進委員会を月曜日を基本に、適宜行う。
- 研究会は全体会、学年部会とする。
- 校内研修の時間は、原則として火曜日とする。
時間は15:20～16:30とする。
- 研究授業は全学年で行う。
- 研究授業及び授業研究会の記録(記録用紙、デジカメ)は学年部で担当する。なお、授業研究会の進行は研究主任が行う。
- 全員が研修に対して目的意識を持ち取り組むため、学年部や個人事にテーマを設定し、学期毎にふり返りを実施し、授業改善に生かす。

9 現職研修について

人権教育研修、特別支援教育、性教育研修、食育研修、道德教育研修、情報教育研修、実技研修、キャリア教育研修、ハートサポート研修、不祥事防止研修等については、担当者と連携を図り、研修の機会を設けていく。また、各種研究会等の報道については、適宜機会を設け、情報提供する。